

音楽理論研究会通信 第2号

Web Site:<http://sound.jp/mts/j/>

2004年9月1日発行 1. Sep. 2004

目次 contents

研究会報告 第4回 5月例会 レポート 第5回 10月例会 ご案内	支部活動 第3回大分例会 事務局より
---	--------------------------

■◇音楽理論研究会第4回例会（5月）レポート

2004年5月23日（日）午後1時50分～午後5時30分 GGサロン（現代ギター社4F）

小河原美子 楽曲分析 ドビュッシー 前奏曲集第1巻より IV「音と香りは夕暮れの大気に漂う」
VII「亜麻色の髪の乙女」

1909年12月から1910年2月というたいへん短い期間に作曲された、この年代までのドビュッシーの音楽語法の集大成とも言われる前奏曲集第1巻より「音と香りは夕暮れの大気に漂う」と「亜麻色の髪の乙女」を楽曲分析した。

「音と香りは夕暮れの大気に漂う」は、低音の動き、調性の移り変わり、偶成和音や並行和音による和声構造を「ゆれ」の視点から解説した。またこの作品は切れ目が無いが、明確な「ゆれ」の中にその構造の輪郭が浮かび上がってくる。この曲においても「ゆれ」の概念が分析の大きな手掛かりとなることを指摘した。

「亜麻色の髪の乙女」は始めにこの曲において頻繁に用いられる五音音階と V_{11} の和音（導音転位）について解説した。続いて各主題の構造・主題の変奏の仕方・各主題の和声構造を解説した後、この曲には $V-I$ へ進行する和音が多いが V を使用することによって V の和音の力強さをやわらげている事、 $V_{11} \cdot V_9 \cdot$ 三和音の対照的な使い方がすぐれている事、調性的な和声進行と旋法的な色合いのバランスのよさを指摘した。また、主題が決して同じ方法では提示されないことが、親しみやすくも飽きさせない秘訣であることも指摘した。

レポーター 角口 琴映

見上潤 旋法理論 再構成の試み 2 ～音素材の淘汰・分類の方法論と階層構造～

本研究は前年の研究に引き続き、「12平均律主義時代」（1750～1950年）と規定される時代を鳥瞰しうる音楽理論の構築を目的とする。この時代の音語法をひとくくりにとらえるために、「旋法」概念を拡張し、調性・無調性にまたがる様々な音の組み合わせ（音程・音階・和音を含む）を、「音素材」概念に止揚した。

音素材分析表によって柴田南雄氏のヘキサコード理論を整理し、「反転移動」概念を抽象化した「K・L・M・N・O字型」による分類によって、ヘキサコードのヴァリエーションの階層構造をより明確にした。これらの方法を2～10音の音素材の抽出に応用し、120個の「オトゲノム」を導き出すプロセスを示した。さらに倍音列・5度圏の音素材分析表によって、調性に関わる音素材が「特異点」として再認識された。

以上の研究を基礎として、時代様式を超えた様々なレベルからの作品分析を「多層分析」と呼ぶ。その応用例として、《トリスタン前奏曲》の冒頭部分を「ジプシー音階、移限音素材、前12音技法、マイクロ構造、低音構成、反復進行、調の枠組み図、リズム、モチーフ操作とその意味論」の観点から多層分析した。最後に、ナティエがまとめた「トリスタン和音」の分析の歴史に、新たな分析を付け加えることによって、これらの方法による分析の可能性の広がり示した。

詳しくはこちらへ <http://www.geocities.jp/dolcecanto2003jp/>

レポーター 小野 直樹/加筆訂正 見上 潤

音楽理論研究会第5回例会（10月）ご案内

2004年10月3日午後1時50分開始

国立音楽大学A1(アイ)スタジオ(☎042-573-5633)

(国立駅南口、線路沿いに立川方向へ徒歩3分) 詳細は裏面参照

■◇音楽理論研究会第5回例会(10月)ご案内

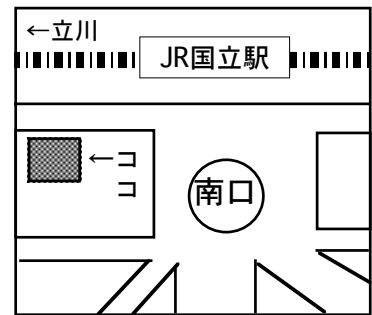
【会場地図】

2004年10月3日午後1時50分開始

国立音楽大学A1(アイ)スタジオ

(☎042-573-5633)(国立音楽大学附属幼稚園地下)

(国立駅南口、線路沿いに立川方向へ徒歩3分)



内容 講演2題 講演者 中村佐和子 楠瀬敏則

講演1 元国立音楽大学教授 中村佐和子 「ソナタ形式の授業風景」

[講演の概要]

- ・「ソナチネ7番I楽章」(クレメンティ) op. 36, No. 1
- ・「Bクラスのソナチネ」(中村佐和子)
(作曲のプロセス再現)

講演2 元群馬大学教授 尚美学園大学芸術情報学部講師 楠瀬 敏則 「音楽の基礎教育の課題」

[講演の概要]

現在日本で行われている音楽の基礎教育には、多くの問題が内在している。何が問題で、どんな改善が必要か、次の視点から、皆さんと共に考えてみたい。

1. 基礎教育は、総合的な音楽指導の中で行われるべきである。
2. 身体や耳を通して、まず、直感的に音楽を把握すべきである。
3. その後で、楽譜や理論の指導が行われなければならないが、その過程は初期の段階から、体系化して行われなければならない。

以上のことについて、ダルクロワーズの理念、コダイのソルフェージュ教育、島岡理論等を基底にして、考察をすすめ、提案したい。

■◇支部活動

音楽理論研究会第3回大分例会について

日時2004年11月21日(日)午前10時～午後5時30分(予定)

会場 大分県立芸術文化短期大学 音楽棟小ホール(お問い合わせは下記事務局まで)

講師 島岡 譲

テーマ:午前 楽曲分析の基礎

午後 楽曲分析:シューベルト「冬の旅」より

■◇事務局より

「音理研通信」第2号をお届けします。内容は第1号の予告通り、5月例会の報告と10月例会のご案内です。今回はレポーターをお願いしてみました。関係者の方ご苦勞様でした。発行が少し遅れてしまい10月例会のご案内が不十分にならないか不安です。特に今回は会場が変わりますのでご注意を。今回はお二人の先生に講演をお願い致しました。多数の方のご来場をお待ちしております。大分例会もよろしく。

音楽理論研究会事務局 ホームページ: <http://sound.jp/mts/>

〒870-0833 大分市上野丘東1-11 大分県立芸術文化短期大学音楽科 小川研究室気付

TEL & FAX 097-545-4429 Email:ogawa@oita-pjc.ac.jp